



「あ
い
し
し
て
る
。」

作なめか

原作「棗イロハが寝取られてくれる / ブルアカ文書」

(<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=22422391>)

いつもより不機嫌そうなイブキがシャーレに訪れた。

「最近イロハ先輩が秘密基地に入れてくれないの…!」



「イロハ先輩と遊びたいのに……」

「私からもイロハに頼んでみるね」
頭を優しく撫でながら諭す。

「本当？」



「本当だよ、だからイブキも元気をよこして」

「うん！」

安心したイブキが笑顔でシャーレから
ゲヘナ学園へ帰っていく。
罪悪感を胸に彼女を見送った。



気づくとキーボードがスマホに届いていた。



日時だけを一方的に告げるメッセージ。
だがそれだけで私は緊張と興奮、そして後悔を覚える。

MomoTalk

イロハ

明日

13時

どうなったかきつかけの光景が脳裏に浮かぶ。

MomoTalk

イロハ


明日

13時

「きつと初めてだから緊張したんですよ、ね？」

イロハと初めての夜、私は失敗した



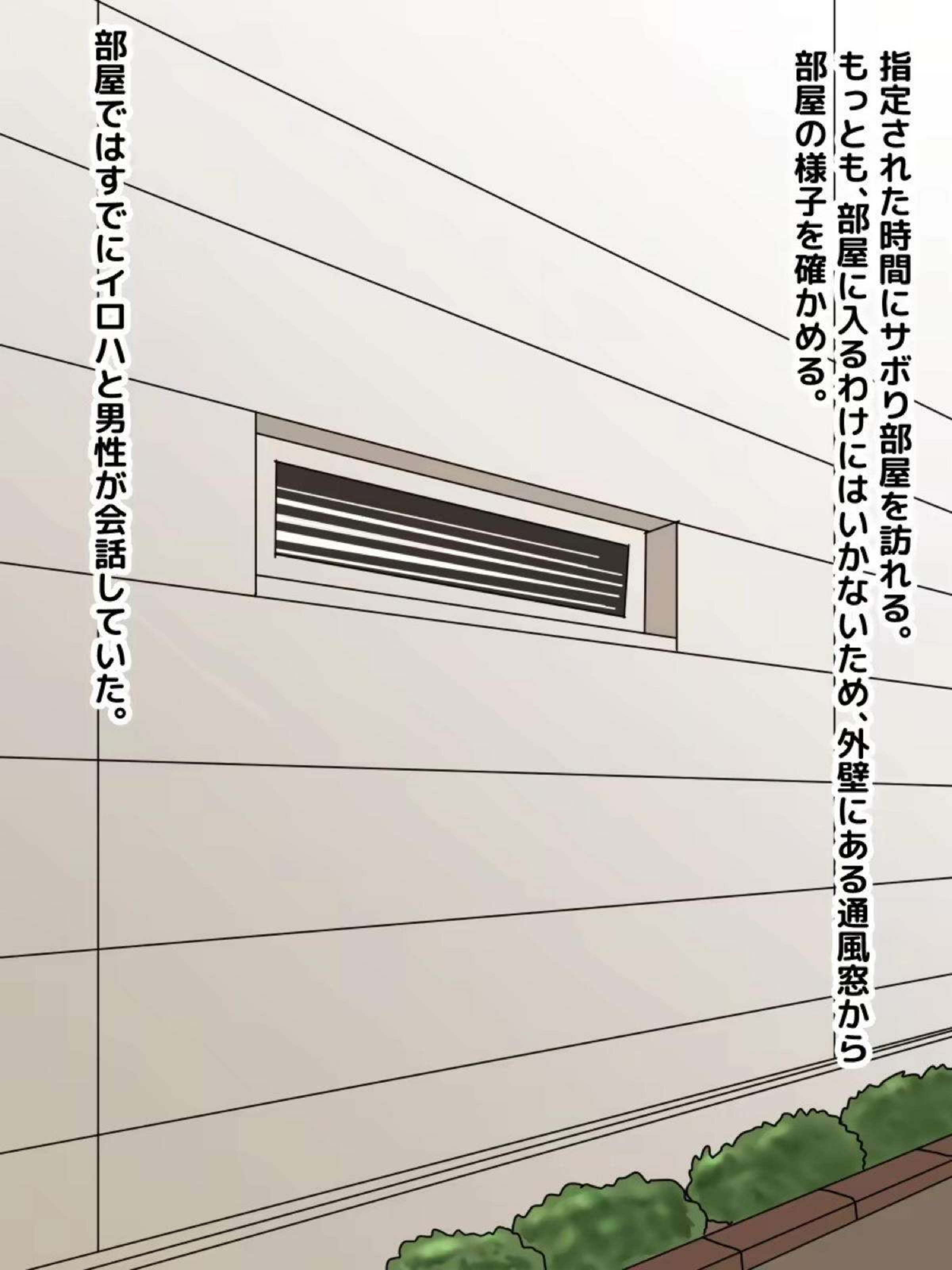


イロハに慰められながら、色々試す内に
私には寝取られ性癖があることが分かった。

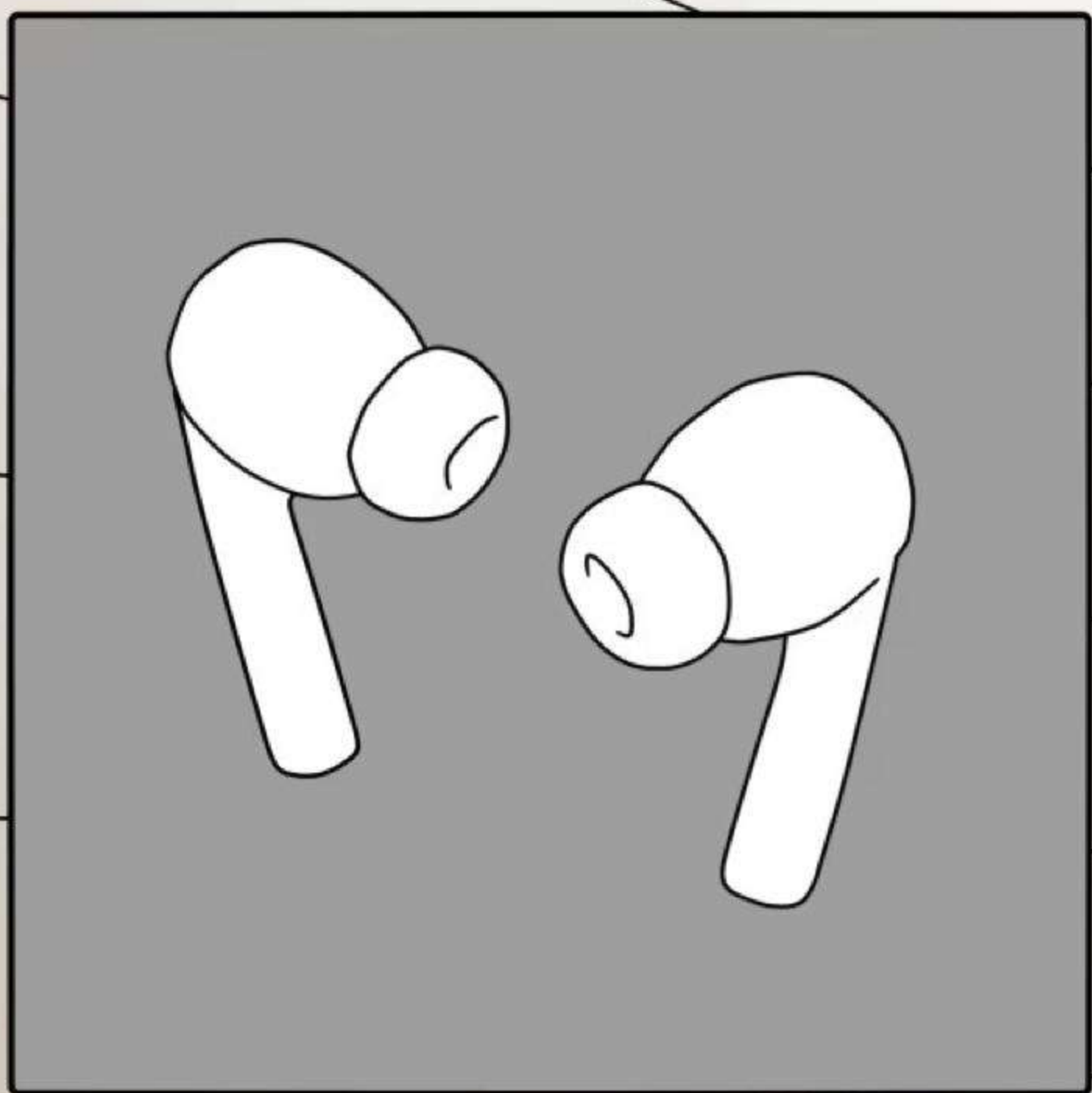
それからイロハはモモトークで連絡するだけになった。
イロハが告げる日時、それはかつてのサボり部屋で
間男……イロハの彼氏と彼女が密会をする日時だった。

指定された時間にサボリ部屋を訪れる。
もつとも、部屋に入るわけにはいかなかったため、外壁にある通風窓から
部屋の様子を確かめる。

部屋ではすでにイロハと男性が会話していた。



私はポケットからイヤホンを取り出す。
これはイロハから渡されたもので、彼女が設置した盗聴器によって
部屋の中の会話が聞き取れる。



恐る恐る窓を覗き込むと、
二人のセックスはまさに絶頂へ向かうところだった。

イヤホンからは男女のくぐもった声と嬌声が聞こえてくる。
「イロハミシーヨハミシー」



「~~~~ッ!」

男が射精に身体を震わせるのと同時に
イロハも絶頂する。

身体をのけぞらせ、全身で快楽を感じているようだ。

ビュルルル
ドクッ

ドクッ
ドクッ

ドクッ

ドクッ



イロハの秘所から男がペニスを引き抜く。
彼が着けているコンドームの先端には白く濁った精液が多量に溜まっている。

同じ男としてその量が1度の射精で出た物だとは
信じがたい量だった。

ドロオ...



男は遠慮などなくイロハの唇に吸い付く。

「んっ……んう……」

イロハは最初驚いたものの、仕方ないといふふうになど彼の接吻に応じる。

ちゅ♡



慣れた手つきで使用済みコンドームを回収するイロハ。
「全く、相変わらぬすごい量ですね……」

れろ……

みただけでも分かるほど大量の精液で満たされたコンドーム。
イロハはその重さを確かめるように舌先で弄ぶ。

「それじゃあごきみのせいね」

とろろ……♡

軽々しく頼む彼氏に、イロハが渋々応じる。

イロハはコンドームを持ち上げると

中に溜まった精液を舌で受け止め、ゆっくろ阻嚙しはじめてNo。

「えあ〜」

えあ〜♡

あ〜♡

舌先をチロチロと動かして精液を弄ぶイロハ。

「チロ……♡飲んで♡」



「ほら、全部飲みましたよ」

精液を飲み干したであろうイロハが
口内を再び男に見せつける。

あ

〜♡

ふはっ♡



「毎回飲ませるとこ見たがりませすよね……」

呆れたようにつぶやきながら、
ペットボトルの水で口内に残った体液を流し込む。




ふとイロハがこちらの方を見る。



「ふふ……
ねえ、もう一度キスしませんか？」

完全にこちらに気づいたイロハは
これまでとは変わって楽しそうな声色で彼氏に甘え始めた。





イロハの求めに彼氏は快く応じる。
舌を絡ませるたびに、唾液を交換するたびに、
互いの視線を独占し合うたびに、無関係の私は情けなく愚息を扱き続ける。
隣で笑っていた彼女が、知らない男に媚びを売り続ける。

彼氏の腕がイロハの胸に触れる。

「またアレですか?」

ため息をつきながらも、イロハが正座をする。

「ほくら、ママのおっぱいおいしいでちゅか〜?」
胸元を開き、赤子に乳を与えるように彼氏に胸を吸わせる。

「それじゃあ赤ちゃん……にしては大きすぎるおちんちん♡
お世話してあげまぢゅね♡」
そのまま甘やかすようにペニスを擦り上げる。



「ほら、おちんちん上下にちゅ〜にちゅ〜♡
気持ちいいでちゅか?」

「たまたまさんにごんごん溜まった白いおしっこ♡
いっぱいびゅっびゅっしましゅうね♡」

プレイを詳細に説明するような言葉は

イロハの彼氏だけでなく、私も喜ばせるものだった。

♡♡♡

♡♡♡



私の興奮が限界点に到達しようとした時、イロハが彼氏からこちらへ視線を向ける。

そのまま舌を出してからかうように左右に動かした。さっきの精飲の様子を思い出してしまい、その蠱惑的な仕草に抗えず射精してしまう。

私が下着を少量の精液で汚したのと同時に、彼氏も射精したようだった。



ドビュ♡

ビュ♡

ビュ♡

イロハの彼氏がコンドームを取り出す。
「あ、ちょっとまってくださいわね」

イロハはコンドームを受け取ると戸棚を漁りだす。
するとイヤホンから音が聞こえなくなった。
おそらくマイクの電源を切ったのだらう。
イロハと目が合うと、彼女はいたがらっぽく笑っていた。



音が聞こえなくなったため、部屋の中を凝視する。
するとイロハは針のようなものでコンドームに穴を開けていた。
思わず叫んでしまうが、室内の二人には聞こえない。



ピス

四つん這いで男にお尻を向けるイロハ。
男は別のコンドームを取り出すことなく彼女の腰を掴んだ。

あ、

ん、

そのまま生の肉棒が挿入される。



すると、イロハの腹部に小さなペイローが浮かんで見えた。
つまり、彼女は妊娠しているのだ。

あゝ

んっ

はまっ

はまっ

ホワァ...

んっ

んっ

気づけば私は悔しさや後悔、
いろいろな感情をないまぜにして
ただひたすらペニスをしごいてた……

もう決して自分のものにはならない、彼女の吐息や嬌声を想像しながらペニスをしごき続ける。

は、

は、

は、

は、

気づくと彼女がこちらに顔を向けていた。大きく口を動かして何か伝えようとしているようだった



口をパクパクとさせるが、何を伝えたいのかわからない。

はぁ..♡

はぁ..♡

縋るようにイヤホンを着けても何も聞こえない。



イロハが口を閉ざすと同時に、男が腰の動きを止めた。
イロハと密着するようにして腰をグリグリと押し付ける。
おそらくは膣内で射精したのだろう。
イロハもその快感に抗えず絶頂を味わっているようだった。

ドクッ

ふーっ

ふーっ

びゅっ
ドクッ

結局イロハが何を伝えようとしたのか、自分には分からないままだ。

END♡